

# クルレンツィス&ムジカエテルナ in ルツエルン 延期された「テオドル」がついに開催

取材・文・写真 中東生  
Text & Photo=Shinobu Naka

ルツエルン音楽祭が長年温めて来たという企画「テオドル」は、2020年4月に開催される予定であったが、コロナ禍によるロックダウンに直撃され延期となった。その後「霧に油揚げをさらわれる」ように「ムジカエテルナ・スイス財団」なるものが設立され、2021年2月に「クルレンツィス&ムジカエテルナ世界初のレジデンシー公演」が同じルツエルンで発表された。しかしこれも2回目のロックダウンに遭い、10月に延期されたため、「世界初」というタイトルは直前のモスクワに奪われてしまったが、10月6日から8日まで無事に開催されたレジデンシー企画をレポートしたい。

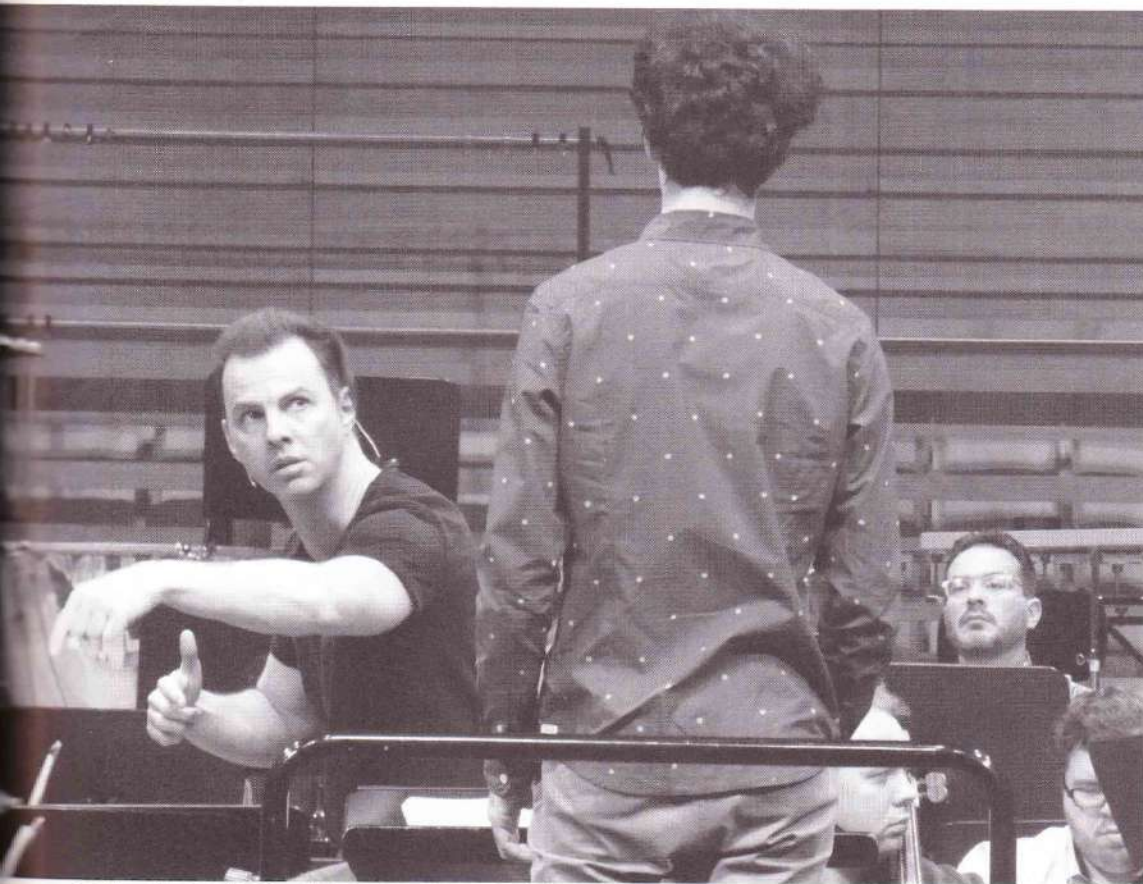
## クルレンツィス・ワールド

まずはKKL(ルツェルン・カルチャー・コングレスセンター)の最上階テラスホールで期間中展示されるアレクサンドラ・ムラヴィエヴァの写真展から幕が開いた。5年間彼らを撮り続けている彼女の姿はよく見かけていたが、その作品が見られるのは興味ぶかった。しかし思ったよりも小規模で、コンセプトに欠けていたのは残念だった。

期間中に映画上映会が3回あった。第1弾はカール・テオドル・ドライヤーの「奇跡(御言葉)」。印象ぶかい映画ではあるが、ムジカエテルナが演奏するわけでもなく、その意図を尋ねると「クルレンツィス・ワールドを聴衆に体験してもらうためのセレクション」という答えだった。そのときは腑に落ちなかったが、その後のコンサート「トリストティア」と波長が合う映画だったのだ。

クルレンツィスがディレクターを務めるデアグレフ・フェスティバルがフランス人作曲家のフィリップ・エルサンに委嘱したこの作品を、2016年の世界初演時にも聴いた。10回目の公演という

Teodor Currentzis & musicAeterna in Luzern



「テオドル」のハイライト、指揮のマスタークラスから

今回は、KKLの舞台いっぱい、そしてバルコニーも効果的に使ったアクティヴな構成になっていた。不特定の宗教観を感じさせる初演時のオーラよりも、囚人たちの自由への渴望などを文字面に出す、現実味を帯びた仕上がりになっていた。ライトやマイクに支障があり、技術面でのサポート不足が露呈したり、ホールに空席が目立ったりしたのは残念だった。

終演後のパネル・ディスカッションでは、作曲家が10年前に訪れた刑務所での体験や囚人たちのコミュニケーションから「トリストティア」が生まれた経緯などを語り、クルレンツィスは彼独特の哲学的な語りで「自由とは、不自由を挙げたのみ説明できる。現在も政治犯が存在するなど、完全な自由がない世の中に疑問を投げかけ、「信仰・自由・光」への愛を伝えたい」と、この作品の存在意義を熱く語った。

## 今回のハイライト、 指揮のマスタークラス

翌日は指揮のマスタークラスで始まったが、これが今回のハイライトと言える濃厚な時間だった。二人のスイス人若手



指揮者が今回のメイン曲であるマーラー「交響曲第5番」を振るのだが、ルツェルン出身のフランソワ・ジラルド・ガルシアがアダージェットから始めた。音楽が止まりそうなくくりテンポでもテンションを保てるムジカエテルナはやはりすごい。「拍を振りすぎたり、楽団員とコンタクトを取りすぎたりして、実現させたい音楽を要求しにいくと、指揮者の魔力を失う。それを手の表情などで創造するのが指揮」というクルレンツィスの指導は、彼の指揮の魔力を自身で言語化した貴重な瞬間だった。

二人目は、トーンハレで行われたパウオ・ヤルヴィのマスタークラスでも聴衆賞を受賞したロラン・ツツフェライで、第1楽章を指揮した。

「楽譜に書いてあることを振るのではなく、君だけが知っていることを指揮しろ。ムード、ライン、真理、エモーションを目で伝える」

これもクルレンツィスの指揮の特徴だ。批判を恐れず、自分がその曲を読み込んで感じたものを大切に、みなを巻き込む。そんな独自の指揮法を惜しげもなく、エネルギッシュに若手に伝えようとするクルレンツィス、そして全力で応援続けたムジカエテルナはやはり「音楽教の修道士集団」だ。

コレオグラフィアーのナン・リニングによる身体言語のマスタークラスも開かれたが、指揮者の部での動きの分析が興味ぶかかった。他人とのかかわりかた、距離の取りかた、波長の合わせかた、そ



満席のKKLで拍手に応えるクルレンツィス



3日間のプログラムを終えて、楽屋前で撮影

して指揮者としてそれらを効果的に使い、登場した瞬間からオーケストラを動かしていくための指導をした。「クルレンツィスはこのメソッドで彼のカリスマ性を確立したのか」と納得しかけたが、いままで協働したことはないという。同じ波長を感じて招待したようだ。一般人も学ぶことの多いコースだった。

この日は映画上映会第2弾テレンス・マリックの「名もなき生涯」と第3弾の「ベニスに死す」の間に、ムジカエテルナ合唱団によるシヨスタコーヴィチ《革命詩人による10の詩》とデイミトリ・スミルノフ《聖ヨハネス・クリソストムの典礼》が演奏された。

### 締めくくりは「交響曲第5番」

最終日の記者会見は直前にキャンセルされ、リハーサルが続けられた。そこから楽団員が3人、バネル・デイスカッションに参加して、「テオドールの夢の音楽を実現するために集まった」、「家族のようにならば波長の強い絆で結ばれている」、「毎回、そのとき感じることを表現する」、「テオドールは天国の作曲家と通じる才能があり、150人の楽団員とコミュニケーションが取れる才能もある。それがないと同じ演奏の繰り返しとなる」等、貴重な証言が聞けた。

そして締めくくりの「交響曲第5番」と、その前に演奏されることを前提にア

レクセイ・リセンスキーが委嘱された《Anaphora》は満席のKKLで初演された。マーラーも立奏で通し、コンサートマスターなどは戦士のように鋭敏だ。出だしのトランペットは意外にも少し割れ、艶のない音色だが、リスクを冒して自由に表現している。アダージェットはゆっくりすぎてロマンティックさに欠けたが、最終楽章は最高にエキサイティングで、踊るように生き生きと加速して終わった。

3日間のプログラムを終えたクルレンツィスは、さっぱりした顔で楽屋から出てきた。そして「こんなレジデンスを東京でも実現させたい」と穏やかに語り、次の街ウィーンに旅立っていった。